

## 長野県白馬高等学校 活動実績報告

### 1 研究開発名

世界水準の山岳リゾート HAKUBA の学びの循環サイクルの構築

### 2 研究開発概要

- (1) PBL の実践を通してのカリキュラム, アセスメントの開発
- (2) 地域をフィールドにした学習活動を推進するための「白馬 SDGs ラボ」の設置
- (3) 地域と連携した授業を推進するためのコンソーシアムの設置

### 3 実績の説明

#### 仮説 1

既存のカリキュラムを体系化し、地域課題を解決するための教科横断型の PBL の実現につなげるために、「チームビルディング→教科学習→PBL」サイクルを各学年段階で構築することで、生徒の学習活動に対する当事者意識と課題解決に向けた意欲と課題解決力が高まる。

#### 仮説 2

環境、共生といったテーマに基づいて学びや実践を行う「白馬 SDGs ラボ」における活動を通じて、生徒と地域の人が SDGs について理解を深めるとともに、地域全体として社会問題に対する関心を高め、地域の人と生徒が協働して地域の未来について考えることができるようになる。

#### 仮説 3

生徒が、地域をフィールドにした PBL 活動を通して、地域の人と関わりながら地域について学びを深めることで、生徒の白馬・小谷地域に対する愛着が高まる。

#### 仮説 1, 仮説 3 に関する活動内容

本校は、大自然に囲まれ国際色豊かな白馬というフィールドを活かした学習活動を行っている。普通科では、白馬の自然環境を活かしたフィールドワークや、野外自然体験学習を行い、国際観光科では、地元の外国人との交流を通し、観光を題材にした実践的な英語の学習や、高校生が宿泊施設の宿泊プランの企画から運営までを行う高校生ホテル実習など、特色的な授業や取組を行っている。既存の授業にチームビルディングと「探究的な学び」の手法（課題設定、情報収集、まとめ・表現）を取り入れた。

#### A チームビルディング

##### (1) CAP 研修

CAP とは Child Assault Prevention (子どもへの暴力防止) の頭文字をとったもので、子どもたちがいじめや痴漢、誘拐、虐待、性暴力といった様々な暴力から自分を守るための人権教育プログラムである。CAP の基本となる考えは、①子どもの権利として「安心・安全・自由」の人権概念②子どもの問題解決への信頼と働きかけ③コミュニティとして家庭・学校・地域をつなぐ、の3つである。生徒たちが学校生活で安心して生活ができるとともに、生徒の心の弾力性（レジリエンス）を育む目的で実施した。

○CAP 教職員ワークショップ 5月20日(木)

○CAP 生徒ワークショップ 5月25日(火), 26日(水)

## (2) チームビルディング

1～3年生の各授業や、HRの時間に短時間のチームビルディングやアイスブレイクを実施し、お互いが安心できる場づくりを行った。

### 【実施例】

#### ○新聞タワー

新聞タワーとは、チームで新聞紙6枚を使ってより高いタワーをつくる。テープやのり、はさみなど道具は一切使わずにタワーを制作する。チーム内でのコミュニケーションやリーダーシップのトレーニングと言われている。

#### ○ブラインドスクエア

ブラインドスクエアとは、目隠し状態になったメンバー全員でロープを手に持ち、正方形をつくるゲーム。チーム内での問題解決、コミュニケーションのトレーニングと言われている。

#### ○コンセンサスゲーム

コンセンサスゲームとは、ある課題について、チーム全員の合意(納得)によって意思決定をするゲーム。課題に正解がある場合は、個人決定とコンセンサスによる集団決定の正確さを比較することで集団活動の有効性に気づくことを狙いとし、正解がない場合は、互いのものの考え方や価値観の違いを知ることを狙いとしている。



## B 教科学習

### (1) 【英語】国際交流／国際理解／英語力向上

#### ・ベトナムホーチミン市台湾学校とのオンライン交流

第1回 6月4日(金) 3時限 国際観光科2年生 【総合英語】

第2回 6月11日(金) 3時限 国際観光科2年生 【総合英語】

⇒ ベトナムと日本の食文化について英語でプレゼンテーションと対話を行った。

#### ・アメリカ・カナダの高校生との交流

7月6日(火) 1, 2時限 普通科2年生 【コミュニケーション英語Ⅱ】

⇒ 日本のアニメや映画に関するクイズを英語で出題、日本の文化について対話を行った。

#### ・松本 English Tour guide バスツアー 【観光コミュニケーション英語】11月1日(月)

⇒ 松本・安曇野の名所を巡りながら、外国人(白馬村在住)に向けて英語でガイドを行い、松本・安曇野の魅力を紹介するとともにおもてなしの心を学ぶ機会。

<学校 ⇒ 松本城 ⇒ 縄手通り ⇒ 大王わさび農場 ⇒ 学校>

### (2) 【理科】地域巡検／自然の理解

#### 【環境Ⅰ・Ⅱ】における巡検

\*小谷の棚田 ⇒ 山間地に位置する棚田での実習と観察。機械を使わない昔ながらの方法で、田起こしから稲刈りまでを行った。



\* 栂池自然園 7月19日(月) ⇒ 山地帯～亜高山帯の植生変化の観察



\* 沼池尻・内山 6月17日(木) ⇒ モリアオガエルの生態を観察



\* フォッサマグナ 10月4日(月)

⇒ ジオパーク 地質の成り立ち観察糸魚川静岡構造線の西縁。断層露頭を観察  
枕状溶岩の観察(海底火山の噴火溶岩の堆積により生成)  
明星山(地下で固まったマグマが隆起露出した。花崗岩一枚岩でクライミングができる)、ラベンダービーチ(ヒスイ拾い)



\* 黒部ダム見学 11月1日(月)

⇒ 巨大ダムが周辺環境に与える影響、下流河川の生態系に与える影響を学ぶ



(3) 【国語表現】 地域の方と協働した調べ学習 白馬・小谷の観光ガイドブック作成

調査内容	地域協力アドバイザー
白馬のパワースポット, 白馬小谷の秘湯, 白馬三山, 八方うさぎ平テラス, 塩の道, 白馬・小谷のアクティビティ, 美麻など	青木美由紀さん (白馬村観光局) ベイコン綾子さん (ブリュワリーパブオーナー) 武藤慶太さん (山のホテルオーナー) 太田悟さん (白馬観光開発) 篠崎久美子さん (村内在住) 太田文敏さん (村内在住) ほか
(A班) 10月18日(月), 19日(火), 25日(月), 26日(火), 11月1日(月), 2日(火)	
(B班) 10月19日(火), 20日(水), 26日(火), 11月2日(火), 5日(金), 9日(火)	

C PBL (Project Based Learning)

(1) 【総合的探究の時間】 1年

- 内 容 課題研究 ～身の回りのこと, 自分の好きなことについて探究しよう～
- 目 的 課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現という探究の手法を身につける。
- 方 法 ①テーマ設定を行う。自分の身の回りのこと,好きなことに関する問いを立てる。  
②自分の立てたテーマについて、文献・インターネット等を通して情報を集める。  
③レポート・スライドにまとめ  
④台湾の学生に向け、オンラインで発表

実施内容

- 9月29日 探究オリエンテーション テーマ決定  
(好きなことを挙げる→それについての簡単な調べ学習→問いの設定)
- 10月13日 地域の方の講演会「探究するとは」  
講師 佐藤敦俊 氏 (モンスタークリフ株式会社)  
本校図書館司書による講義・調べ方レクチャー①
- 11月17日 県立図書館によるオンライン講義・調べ方レクチャー②
- 11月24日 文献調査「長野県立図書館研修」
- 12月 1日 調査のまとめ  
まとめ方レクチャー
- 12月17日 糸魚川高校との交流学習  
「ブレインストーミングとKJ法で  
地域について考えまとめて発表する」
- 12月 8日 発表準備 (レポート・スライド制作)
- 1月19日 レポート提出・チェック
- 1月26日 校内 (クラス内) 発表
- 3月 7日 台湾の学生に向け発表・交流



(2) 【商業・地歴・総合探究】2年 高校生ホテル実習

「地域の基幹産業である『観光』の魅力再発見と観光人材育成」を目的に、お客様を迎える立場で、白馬の魅力のとらえ方や、サービスを行う上での心配り、おもてなしの心を実践的に学ぶ。

○3年生

開催日 令和3年9月6日(月)～7日(火)

場所 白馬東急ホテル

実施生徒 国際観光科3年生 観光コース 19名

※新型コロナウイルス感染症拡大のため、事前学習の一部のみを実施。

○2年生

開催日 令和3年11月25日(木)～26日(金)

場所 白馬八方温泉 しろうま荘、丸金旅館

実施生徒 国際観光科2年生 27名

※新型コロナウイルス感染症対策の一環として、実習生とお客様の密集を避けるために2か所で分散開催とした。

事前学習 10月26日 オリエンテーション

28日 しろうま荘、丸金旅館支配人講話  
「宿の仕事の魅力について」

11月16日 現地にて施設見学・仕事説明

11月19日 現地にてサービス・接遇練習1

11月22日 現地にてサービス・接遇練習2

11月24日 現地にてサービス・接遇練習3

本番 11月25日、26日

宿泊者数 しろうま荘 12組 25人

丸金旅館 11組 20人



(3) 商業 3年 【スポーツビジネス】

地域応援10代フェス 8月17日(火) 岩岳リゾート

⇒ コロナ禍で多くのイベントが自粛される中、発表の場を失った10代の若者にその場を提供し、地域の人たちに音楽を通じて元気を届けたいという思いで生徒が発案、企画運営にあたった。

必要資金はクラウドファンディングによって集めた。

⇒ 12月12日(日) マイプロジェクト  
長野県 Summitにて長野県知事賞受賞  
全国 Summit 出場決定



## 仮説2に関する活動内容

「地域と暮らしのゼロカーボン勉強会」の開催 会場：ノルウェイビレッジ

白馬村は、2019年12月に「気候非常事態宣言」、2020年2月に「ゼロカーボンシティ宣言」をして、2050年に二酸化炭素排出量を実質ゼロにすることを目指している。ゼロカーボン達成に向けた基本方針等を協議している「白馬村再生可能エネルギー連絡協議会」の委員に白馬SDGsラボと生徒3名が昨年度選ばれた。この委員の有志により「地域と暮らしのゼロカーボン勉強会」が立ち上げられ、ゼロカーボンに関する勉強会を開催した。

- 第1回 5月20日 ゼロカーボンって何？
- 第2回 6月3日 地域から取り組むゼロカーボン，市民主体の視点から
- 第3回 6月10日 サーキュラーエコノミー～欧州実践例から循環型経済の可能性を学ぶ～
- 第4回 6月24日 みんなでやってみよう！コンポストで生ごみの堆肥化
- 第5回 7月8日 白馬のゴミのゆくえ ～リサイクルを超えるゴミの新潮流～
- 第6回 7月29日 再生可能エネルギーとデジタルグリッド
- 第7回 9月9日 建物の断熱と気密の重要性
- 第8回 9月30日 消費から考えるゼロカーボン
- 第9回 10月21日 アクティブ・ブック・ダイアログ®で読む『サーキュラーエコノミー』
- 第10回 11月11日 南国の島と雪国の村の子どもたち
- 第11回 11月25日 八方尾根スキー場 脱炭素への道
- 第12回 12月2日 フライブルクのSDGs 市民参加がここまできているワケ

## その他の活動内容

### (1) グローバル講演会

「社会における自己の役割」や「自分らしい生き方」を考える機会として毎年実施

○第1回 10月27日(水) 14:00から 会場 ウイング21

講師：福島 のり子 氏 (バンクーバーオリンピック出場，本校卒業生)

演題：「白馬で生きる」

パネルディスカッション：白馬の良さと将来のビジョンについて生徒3人が意見交換



### (2) デュアル実習

国際観光科3年生6名が、それぞれ希望した事業所で放課後や休日を利用して50時間程度の体験実習を実施。学びの成果は、12月の白馬フォーラムにて発表。十分な学修の成果が認められた場合、該当生徒には「観光I」の増加単位として2単位が認定される。11月から普通科2年生2名が実施。

[今年度協力企業・自治体]

(株)岩岳リゾート, (株)シェラリゾート白馬, 白馬東急ホテル, パタゴニア白馬店, 白馬村(順不同)



(3) 白馬フォーラム～学習成果発表会～

日時 12月17日(金) 9時30分から12時まで

会場 ウイング21

目的 自分の興味・関心があることから具体的なアクションを起こし行動する人を増やす

発表者 探究活動に取り組んだ生徒の代表者(1～3年生のべ28名)

(4) SDGsに関する地域協働の取り組み

○サーキュラーエコノミー(循環型社会)実現に向けて

白馬村観光局と連携し、国際観光科1年生【観光I】がワークショップ参加。

対面WS: 5月27日(木) 5・6時限 オンラインWS: 6月8日(火) 2・3時限

講師: 佐宗邦威氏(京都造形芸術大学創造学習センター客員教授)

7月1日(木) ビジョンデザインブートキャンプに生徒5名が参加。

白馬村都市計画マスタープラン作製に協力

○「地域と学校で取り組むSDGs」オンライン発表 <2年生2名>

10月12日(火) 生涯学習推進センター

昨年実施した断熱プロジェクトと今年度取り組み中のマイボトル制作について発表。

○「信州環境フェア2021 ～ゼロカーボン実現に向けて～」 <1年生2名>

8月20日(金) 長野市役所

降雪量の減少が観光業に与える影響を実感したことから、YouTubeを通じて白馬の魅力を発信するようになったことを学生プレゼンテーションとして発表。

(5) 学習院大学(深見嘉明研究室)とのオンライン学習 <1年生5名>

9月15日(水) から毎週水曜日

白馬の課題について大学生とともに考え、課題解決に向けて提案し、それに対して助言をもらいながら学びを深めている。

(6) 小中高全国気候サミット(浜松開誠館高校主催) <2年生2名>

10月9日(土) オンライン参加

「私たちはどんな未来を生きたいか」「気候非常事態宣言都市が増えないのはなぜ?」

「私たちが地域協働を実現するためには」の3つの観点でディスカッション。

(7) 日台ユースセッション「WEB版小水力甲子園」 <1年生6名>

10月29日(金) オンライン参加

将来自分たちが地域の再生可能エネルギーと向き合い、関わるためにはどのような情報が必要か、台湾の高校生や日本の高等専門学校を含めた5校でセッションを行った。

4 目標の進捗状況、成果、評価

本校において地域と協働した学びを体験した生徒たちが、将来、どのような形でこの地域に関わることができるかという点については今後を見守るほかはないが、以下に示す3つの仮説に基づいて進めてきた様々な取り組みにより、地域における生徒の学びを支えるシステムの構築と地域から支えてもらっているという実感を持ち、地域の未来を見据え、地域課題の解決に積極的に関わろうとする生徒の育成については、おおむね目標達成に向けて順調に推移している。

仮説1 既存のカリキュラムを体系化し、地域課題を解決するための教科横断型のPBLの実現に必要なために、「チームビルディング→教科学習→PBL」サイクルを各学年段階で構築することで、生徒の学習活動に対する当事者意識と課題解決に向けた意欲と課題解決力が高まる。

仮説2 環境、共生といったテーマに基づいて学びや実践を行う「白馬SDGsラボ」における活動を通じて、生徒と地域の人がSDGsについて理解を深めるとともに、地域全体として社会問題に対する関心を高め、地域の人と生徒が協働して地域の未来について考えることができるようになる。

仮説3 生徒が、地域をフィールドにしたPBL活動を通して、地域の人と関わりながら地域について学びを深めることで、生徒の白馬・小谷地域に対する愛着が高まる。

仮説1に関して「高校魅力化評価システム」(以下、評価システム)の結果に基づく分析

①「社会性に関わる学習活動」のうち「15 地域の課題の解決方法について考える」について、肯定的な回答をした生徒の割合

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、地域における実習の多くが実施できなかった2020年度は全体平均で47.8%と低迷したものの、2019年と2021年の2か年においては、すべての学年で前年度を上回る数値となった。さらに、「16 日本や世界の課題の解決方法について考える」という項目も、2019年47.2%、2020年47.2%、2021年56.3%と上昇し、関心が高まっている。

②「主体性に関わる学習環境」のうち「21 挑戦する人に対して応援する雰囲気がある」について、肯定的な回答をした生徒の割合

2019年79.2%、2020年81.8%、2021年91.3%と年々上昇している。これは、2019年と2020年において、白馬のシンボルである良質なパウダースノーの減少という切実な問題意識をもった一部の生徒が気候マーチや教室の断熱化という活動に取り組んだことをきっかけとして、SDGsの取り組みを身近に感じ、自分も関わってみたいと考える生徒が増えたためと考えられる。

③授業や学校活動の生徒の様子から

あらかじめ設定したカリキュラムが生徒の学習活動に対する当事者意識を高めた実感するところまでは至らなかったが、一部の生徒には、地域での実習体験を通して学ぶことの意義を見出し、知識やスキルのインプットが必要な教科学習にも意欲的に取り組む姿が見られた。



仮説 2 に関して

①「社会性に関わる学習環境」のうち「29 地域の人や課題にじかに触れる機会がある」について、肯定的な回答をした生徒の割合。

2019年 68.5%，2020年 59.7%，2021年 73.0%と上昇がみられた。これは、白馬 SDGs ラボの活動と生徒の活動がうまく融合し、地域における気候変動や SDGs に関する取り組みの情報が本校に多くもたらされることになったことで、授業に地域課題が多く取り込まれ、それを契機に地域へ出て活動したいと考える生徒が増えたためと考えられる。

仮説 3 に関して

①「社会性に関わる学習環境」のうち「19 地域から大切にされている雰囲気を感じる」および「25 興味を持ったことに対してすぐに橋渡しをしてくれる大人がいる」について、肯定的な回答をした生徒の割合。

- ・新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、地域における実習の多くが実施できなかった 2020 年度はやや低迷したものの 2021 年度は 2019 年度水準と同じ 70%以上の生徒が肯定的な回答をしている。
- ・国際観光科が全国募集をしている関係で、本校には県外のほか、県内でも地元以外の地域から入学して寮や下宿で生活する生徒が一定数存在する。地域との関わりを増やすために、寮では独自にボランティア活動への参加を推奨し、それに応じる生徒も多数いる。そうした地域との関わりに地元の生徒を巻き込み、地域と学校との交流も深められている。

②「協働性に関わる学習環境」のうち「23 ありのままの自分が尊重される雰囲気がある」について肯定的な回答をした生徒の割合。

2019年 64.0%，2020年 68.6%，2021年 80.2%と大幅な上昇がみられた。これは地域の人や本校職員が生徒に関わる際に、生徒の考えを否定せず個性的な考えも受け止めようという姿勢が定着したためではないかと考える。また、大人の認識も 2019 年は 50.0%であったが 2021 年は 77.8%と大幅に上昇した。

## 5 次年度以降の課題及び改善点

本研究の初年度は、インバウンドを軸とした地域振興の真っただ中での研究推進であったが、それに続く 2 年間は、まさにコロナ禍においてどうやって地域を守っていくかという、地域の切実な思いを間近に感じての取り組みとなった。

現在、白馬・小谷地域では、この地域ならではの雄大な自然環境を生かした通年型マウンテンリゾートの実現をめざした様々な取り組みを行っているが、この取り組みによって、地元のローカルと移住者、自治体と民間企業、日本人と外国人など、多様な結びつきとダイナミックな動きが生み出されている。白馬・小谷地域にとって、今がまさに「変革期」といえる。

本校は、この変革期の大きなエネルギーも取り込みながら、「地域が学校の学びを支え、そこで学んだ生徒たちがやがて地域を支えるという循環」の創成を目標として本研究に取り組んできた。そこで改めて強く認識したことは、本校の特色ある教育活動が“白馬”という地域の特性とそこに住む人々の多様性によって支えられていることであった。

この取り組みを通して、生徒や地域の意識改革などで成果をあげられた一方で、地域の力を学校の教育活動に取り込むことが十分にはできなかったという課題も明らかとなった。

今考えられる要因として 3 つのことが挙げられる。

1 つめは地域の時間と学校の時間がうまく合わないことである。地域の人との一緒になってワ

ークショップや活動をする場合、企業や団体が業務として行う場合は平日の昼間に短期集中で行われる。地域の有志による活動の場合は平日の夜か土日、休日に行われることが多い。学校は授業の場合、毎週決まった時間に50分単位で授業が行われている。地域と学校がお互いに時間を調整したり、学校内での授業交換など課題が多い。授業で生徒に興味・関心を持たせ、課外の活動として地域の有志の活動に生徒が参加する方法が現状では最適であると考えるが、授業で学んだことをもとに地域で活動するという流れをより体系化していきたい。

2つめは、職員が地域の現状を理解するには時間がかかることである。本校の教育活動は、地域との結びつきも強く、フィールドワークを基本としていることから、他の普通科高校から異動してきたばかりの教員は戸惑うことが多い。複数年かけて授業を行う中で、徐々に地域関係者とよりよい関係性が構築されるが、教員には定期的な人事異動があり、地域のことを理解した頃に異動となることが多い。本校には、教育活動を支える地域コンソーシアムがあり、有益なご提案を継続的にいただいているが、直接それに関わる教員以外には接点がなく、本研究では全職員が地域の方とのつながりを持つまでには至らなかった。地域にはキーパーソンとなる人物が何人かいるので、その方と教員がつながり、各教科の授業に還元・転換できるような仕組みを構築したい。また、地域との連携授業を実施する際には、担当を複数名で対応し、属人的な地域連携から組織としての地域連携の仕組みの構築も必要である。

3つめは、学びをどのようにプログラムするかである。探究学習をより効果的にするには本人の興味・関心に基づく知的好奇心といったマインドと情報収集や分析といったスキルが必要である。本校生徒には、体験的な学習を通じて地域や社会に興味・関心を持ち積極的に取り組む様子が見られた。一方で、データや既存資料からの情報収集や論理的な考察、関連知識による総括といった点についての苦手意識を払しょくするまでには至らなかった。体験的な学習と関連する知識やスキルに取り組む学習をうまく組み合わせた授業展開、情報収集や関連知識のインプットが得意な生徒と、地域や社会に興味・関心が高い生徒とがチームになり、お互いの得意な部分を生かせる環境づくりをすることで、個々の生徒が生きる学びを構築することが必要である。